

## 二人三脚

### 第2編 14章

仲保者は二つの性質(本性)が統一された人格を持っておられる。



キリストが私たちの仲保者になられたことについて語るとき、それは彼の神性だけを語っていたり、あるいは人性だけを語っているのではないのです。いつもキリストが仲保者であることは彼の神性と人性の結合された統一性を通して語られているのです。「キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます」(コリント第一 15:24)と言うパウロの言葉もキリストをその観点から語っているのです。

「二人三脚」という運動会の競技を知っていますか。二人の人が三本の足になって競争するゲームです。二人一組となって二人三脚のゲームは行われます。男女が一組となってこの二人三脚をしたとしましょう。一方の足は誰のものでしょうか。男性のものでしょうか。もう一方の足はだれのものでしょうか。女性のものでしょうか。それでは紐で二本の足が一本に固く結ばれた真ん中の足は誰のものでしょうか。男性のものでしょうか。そうではありません。それでは女性のものでしょうか。そうでもないでしょう。それならばその足の持ち主は誰になるのでしょうか。それは二人のものでしょうか。紐で二本の足を結んでいるのでそれは一本の足のように見えるかもしれませんが、それぞれの特性をそのまま維持したまま二本の足が一つに結合されて独特の足になっているのです。

キリストの神性は神性として、人性は人性として存在します。その二つの本質は混合されることなく、またどちらか一方がもう一方を否定してしまうことはありません。また、二つの性質がキリストの中で別々に離れて存在しているのでもありません。二つの本質は完全に区別されますが、同時に深く結びついて一つの統一した人格を形成しているのです。

### 第1節 二重性と統一性

「言(ことば)は肉となられた」という聖書のみ言葉は言が肉に変化したとか、肉と混合されて見分けることができなくなったという意味ではありません。言(神性)と肉(人性)はそれぞれ二つの本質にどのような変化も損傷もないまま、互いに結合されてキリストとなったということなのです。本質(Substance)の混合ではなく人格(person)における結合と統一がなされた

というみ言葉なのです。二人三脚の三本の足を考えると少し助けになるかもしれません。もちろん、二つの性質の結合はあまりにも神秘的で偉大な出来事ですからどのようなたとえもそれを完璧に説明することは不可能でしょう。

それでもここでは、人間についてのたとえで考えてみましょう。人間は霊魂と肉体という二つの性質によって神秘的に結合されて一つの人格をなしています。霊魂は肉体ではなく、肉体は霊魂ではありません。そして人間について何かを語るとき、あるものは肉体には当てはまりますが、霊魂にはまったく当てはまりません。これとは反対の場合もあり得ます。また、人間全体について語る言葉を霊魂や肉体それぞれに当てはめようとすれば、つじつまが合わない場合も生じます。「人はこうして生きる者となった」(創世記2:7)

また、あるときには霊魂の特性で肉体を説明するために使ったり、肉体の特性で霊魂を説明することもあるのです。しかし、それらによって構成された人間は複数(いくつもの人格を持った者)ではなく一人の人間なのです。そのようなすべての表現は人が二つの要素で結合されて一つの人格をなして存在していることを語ってくれています。聖書がキリストについて語るときもこれと同じです。

やはり次のように四通りに表現されています。第一に神性についてだけ語られています。第二に人性についてだけ語られています。第三に両性についてだけ語られています。このときにはどちらか一方の属性にだけ別々に適用されるではありません。そして第四に、聖書は古代の著述家たちが「固有性の交流」と呼んだように両性の統一性と相互の密接な交流を語っているときもあるのです。

聖書の証言から直接に例をあげてみましょう。第一にキリストの神性にだけに当てはまる表現です。「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」(ヨハネ8:58) (キリストは)「すべてのものが造られる前に生まれた方です。…御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています」(コロサイ1:15、17) また、主は「世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光」(ヨハネ17:5)「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ」(ヨハネ5:17)と語られています。

第二に人性だけに適用される表現です。「わたしの僕」(イザヤ42:1)「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」(ルカ2:52)「わたしは、自分の栄光は求めていない」(ヨハネ8:50)「その日、その時は、だれも知らない」(マルコ13:32; マタイ24:36)「わたしがあなたがたに言う言葉は、自分から話しているのではない」(ヨハネ14:10、6:38) また人々が彼を「見えるとおり」と言っていることなどです(ルカ24:39)。このすべてのみ言葉はキリストの人性にだけ関連するものなのです。

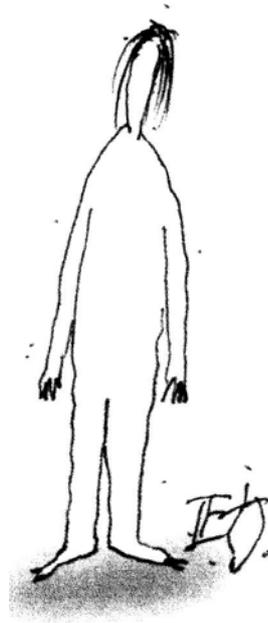
第三に神性と人性が結合された統一体にだけ該当する表現です。「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった」(ルカ24:31) 弟子たちの目で見ることができた復活された主に対する表現は神性、あるいは人性のどちらか一方についてだけでは使用することができないものです。

そして第四に二つの性質が相互交流する場合についての表現です。「神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(使徒20:28)「栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう」(コリント第一2:8)「手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について」(ヨハネ第一1:1)「神は、その独り子をお与えになった」(ヨハネ3:16) 神には血もありませんし、死ぬこと

も、また私たちが手で触れることもできません。しかし、神であられるとともに同時にまことの人であられるキリストが私たちのために血を流し、死んでくださったために人間性について語られるその言葉が彼の神性にも当てはめられているのです。

第2節 仲保者は神性と人性の統一された人格を持っておられる。

特にヨハネによる福音書にはキリストの神性と人性を同時に語っている表現が多く見られます。例をあげれば、キリストは父から権能を授けられたために罪を赦し(ヨハネ1:29;参照、マルコ2:10)、求める者に命を与え、義と聖と救いを与えることができると語られています。また、彼は生きている者と死んだ者の裁き主として任命されて、父と同じように敬われると語られています(ヨハネ5:21~23)。また、彼は世の光であり(ヨハネ9:5、8:12) 善き牧者であり、唯一の門で(ヨハネ10:11、9) まことのぶどうの木と言われています(ヨハネ15:1)。キリストは人であられると同時に真の神であられるためにそのような権威と力を持たれたのです。



ですからキリストが私たちの仲保者になられたことについて語るとき、それは彼の神性だけを語っていたり、あるいは人性だけを語っているのではないのです。いつもキリストが仲保者であることは彼の神性と人性の結合された統一性を通して語られているのです。「キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます」(コリント第一15:24)と言うパウロの言葉もキリストをその観点から語っているのです。

もちろん神の子の国は最初もなく終わりもありません。しかし、彼は自分を捨てて僕の身分を取り(フィリピ2:7) しばらくの間へりくだりの生活をなされ(フィリピ2:8) へりくだりの生活を終えた後に栄光と誉れの冠を授けられて(ヘブライ2:9) 最後の審判者として高く上げられ、地上のもの地下のものすべてが彼にひざまずくようになると語られています(フィリピ2:10)。そして彼はご自分が父から受けたすべてのものを父に引き渡され、神がすべてにおいてすべてとなられるのです(コリント第一15:28)。

神がキリストを私たちに仲保者として与えられた目的は彼の御手を通して私たちが治めようされるためではなかったでしょうか。キリストが父の右に座られたということはそのような意味で解釈しなければなりません(マルコ16:19;ローマ8:34)。しかし、やがて私たちが神に直接に出会い、喜びにあふれるときが来れば、キリストの仲保者としての職責は終を上げ、創造以前にあふれていた栄光が再び彼の元に帰って来るのです。

特にキリストを主と呼ぶことも彼が神と私たちの中で仲保者となられている間だけに用いられる称号なのです(コリント第一8:6)。私たちすべてがキリストの神的な栄光を直接見るようになる日が来れば、キリストは父から受けたその主権を父に返され、父はもうキリストの頭になることはないのです。そのときが来れば、しばらくの間、幕で覆われていたキリストの神性が満ちあふれて輝き出するためです。このように私たちの仲保者は神性と人性がそれぞれ少しも傷つけられずに結合され、一つの統一した人格をなしておられるのです。

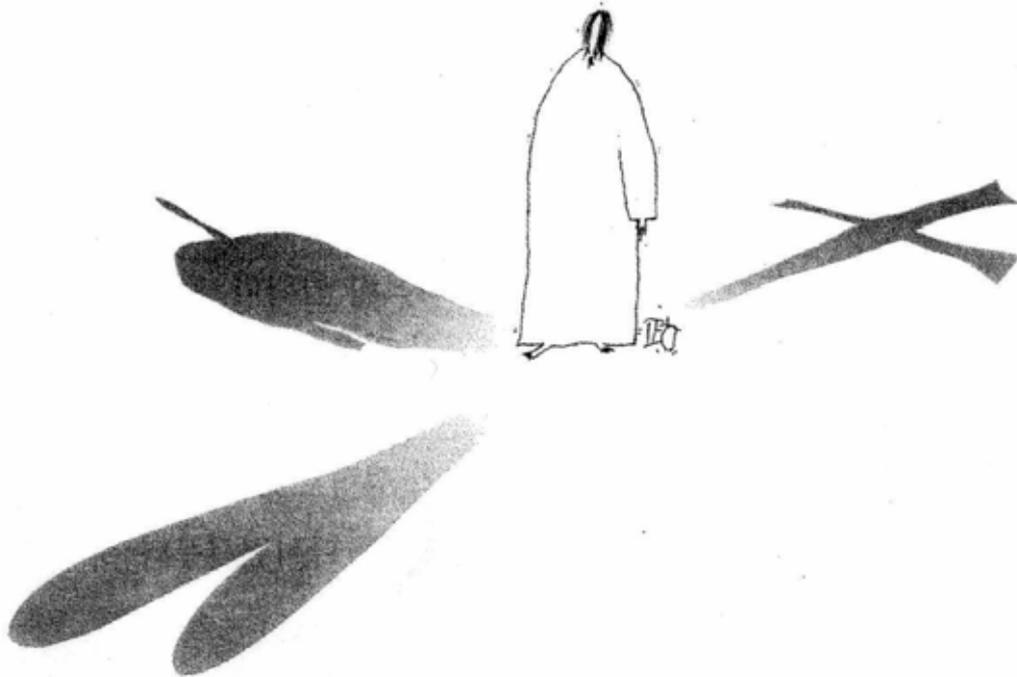
### 第3節 精神を病む異端者たちの荒唐無稽な想像

狂った者のように暴れ回る異端者たちはキリストの人性を捕まえては神性を取り去ろうとしたり、神性を捕まえては人生を取り去ろうとします。また統一された両性について語らなければならぬときにはどちらか一方には適用されない属性を捕まえて、二つの性質をみな否定しようとするのです。ちょうどそれは、キリストが人であるならば神ではなく、神であるならば人ではなく、また神であると同時に人であるとするならば、それは人でも、神でもないと主張するようなものです。このような者たちの中にはネストリウス、エウテュケス、そしてセルベトがいます。

ネストリウスはキリストの神性と人性が混合されることを恐れました。あまりにもそれを警戒しすぎたために二つの本性を分離させてしまったのです。二つの本性の結合を混合と誤解してしまったためです。神は母を持つことができず、どのような被造物でも神性を生むことはできないと考えた彼はマリアが神の子（神性）を生んだという言葉（ルカ 1：43）を非常に憎みました。キリストの内にある神性と人性は絶対に結びつけられることがなく、徹底して分離されなければならないと主張したのです。これでは二重（人格）のキリストになってしまいます。

また私たちはエウテュケスの危険な考えを警戒しなければなりません。ネストリウスが神性と人性を完全に分離させてしまった罪で431年にエペソ公会議でアレキサンドリアのキュリオスの主導の元に異端とされた後、キュリオスの教えを拡大して解釈したエウテュケスはキリストの人性をほとんど否定してしまうほどに無視してしまったことで448年にコンスタンチノポリス公会議でやはり異端として断罪されました。いずれにせよ私たちは二つの本性を混合させようとしたり、分離させようとするすべての考えを受入れることはできません（参照、ヨハネ2：19）。

ところがこの後に彼らの過ちをセルベトが受け継ぎ三位一体を否認し、キリストの神性を拒否したのです。つまり、キリストは神の本質と霊と肉、そして創造されない三つの要素（ロゴス、知恵、言）で混ぜ合わされた虚構として説明したのです。セルベトはキリストが神の子であると



呼ぶ理由はただ彼が聖霊によって身ごもった処女から生まれたためであると言います。キリストは肉になってこの地上に現れてから神の子になり始めたのだと言うのです。

またセルベトはキリストの肉体が神と全く同じ本性になっており、彼の肉が神に変化することで、言が人になったのだと主張しました。そうでなければ、キリストを神の子として考えることはできないと言うのです。しかし、肉体が神性自体であれば、神性が宿る神殿（宮）ではなくなります。そして聖書はキリストが宇宙創造以前にも神の子であり、また同時に人の子として生まれられたことを強調して証言しているのです（コロサイ 1：15 以下；ローマ 1：1~4；コリント第二 13：4；ローマ 9：5）。

#### まとめの言葉

キリストは完全な人であり、同時に完全な神です。人となられたときにも神であることをやめず、その上で人ではなくなることもありませんでした。従って苦難を受けられたときもキリストの人生だけが苦難をうけたのではなく、二つの本性が統一された人格を持つ仲保者として受けられたのです。もしそうでなければ彼は完全な仲保者になることができないのです。